

## タイトル…解決屋

世の中は悩みを抱える人間で溢れている。

お金、境遇、才能などの実際的な悩みや嫉妬、怠惰、我慢などの精神的な悩み。

もちろん世の悩みはこれらに二分化できるわけではなくて、もっと複雑に入り組みねじれてしまっている。感情を磨耗させて時には死へと追い込む、世に蔓延する悩みとは病氣のように検査すれば原因や治療法が見つかるわけでもない、タチの悪い病だ。

故にカウンセラーや精神科医といった仕事がある。

僕の営む解決屋もその仕事の一つだ。人に知られる機会の少ない、いわゆる隠れた名店だけれどね。名店を自称するのはちょっとアレだけど、腕はいいから誇張はしていない。どんよりとした暗い人も僕の手にかかれば、あつという間に往來を三回転トゥーループで駆け抜ける奇人……いや、喜人に早変わりさ。

週に一度、ひどい時は月に一度……閑古鳥の泣く探偵事務所の方がよっぽど客入りは良いけど。

今、僕は数少ないお客様の相手をしている。

彼女の名前は花守 華奈（はなもり かな）。

巷では名の通った不良の高校生だ。虎の刺繍が入ったスカジャンをブレザーがわりに羽織り、三白眼は猛禽類の如き鋭さを持ち、サイドに結われた金髪は獅子の尻尾を思わせる。

ヒエラルキーのトップ陣をチャンポンにしたような最強少女でも、凡人と変わらず悩みを抱えているのだ。けど、カツアゲしたけど千円しか持ってなかったとか、タバコを買おうにも年確が厳しいとか、そんなしょうもない悩みでないことは理解してほしい。でなければ解決屋に辿り着くことすらできないのだから。

悩みとは複雑に入り組みねじれている。もしそれが迷路みたいに入り口と出口が明確に設置されているなら、これより簡単な事はない。ゆっくり時間をかけて出口から悩みを吐き出せば解決する。

多くの場合は出口がない。悩みは入り口から注がれ続け、いづれ迷路が爆発する。解決するには出口の設置……相談や薬を使ってそれを行うのがカウンセラーや精神科医だ。解決屋が行うのは入り口から全て吸い出すという処置。利点は仮説の出口とは違い確実に早期決着が望める点だ。

僕はそれで幾億という悩みを解決してきた。

しかし、処置を行うには特殊なプロセスを踏まなくてはならない。

これがなんというか……十六のうら若き乙女である彼女には過激な側面もあって説得に苦労したんだけど、「逃げるの？」の煽り文句で了承してくれてチョロかったよ。

花守はべたんと可愛らしい女の子座りで羞恥心から顔を真っ赤にして目尻には涙浮かべていた。弱々しい三白眼はギャップも相まって庇護欲を掻き立てた。

うーん、これは……少しからい過ぎたかな。

つい一時間前まであんなに生意気だった花守がこんな醜態を晒していると、僕も自責の念に駆られてしまう。からかったと言っても実際の時間では数秒だ、たぶん。夢は覚醒直前の数秒に見るというでしょ？

僕達の現状……居る場所は夢の世界だ。

ネズミの王国じゃないよ、もちろん。寝ている時に見る夢、花守の夢の中に僕達は今、存在しているんだ。

「ほら、カナちゃん、メソメソしてないで立って、はい、アンヨが上手アンヨが上手」

「うっせえ！ 死なすぞ！」

態度とは裏腹に重たいハンマーパンチが僕の胸に飛び込む。うう……痛い。

「さっきまで僕のことを散々、詐欺師だの薄っぺらいだのとコケにしてくれた訳だけど、カナちゃんは現状を理解できているのかな」

「わかるわけねえだろ！ こんなハリボテみてえな光景……」

花守が辺りを指さして、すぐに耐えきれなくなって俯く。

語気を荒くして強がってはみたが、やはり恥ずかしいものは恥ずかしいらしい。眼前に広がる奇々怪々な風景は初めて見る見慣れたものだ。

夢の世界とは、花守の見た物聞いた物の経験によって具現され、感情によって彩られた世界。それを踏まえて次を読んでほしい。

青空は巨大なピンク色の綿飴によってコーティングされ、色とりどりの星がトッピングのようにくっついている。雲の代わりに大小様々なぬいぐるみや絢爛なメリーゴーランドなどの巨大遊具がいくつ浮かぶ。

道は白黒のアイスボックススクッキーで舗装。連立するファンタジーな家たち。お菓子の家はもちろん、窓やドアがついた大木やぬいぐるみ、遠くには壮観な西洋のお城が望める。

これが彼女の夢の世界。つまり、常日頃から童女のようにプリンセスに夢焦がれ、御伽噺の世界に憧憬を抱いているということに他ならない。

どうだろう、初対面の相手にも暴力を振るう勢いの非行少女の内面が、女兒も泣いて喜ぶメルヘン世界を持つむつりメルヘンさんだったら。自分の頭に吊るされた人参を追ってしまう馬と等しく、花守というおもちやで遊ぶなどという方が無理じゃない？ 僕は我慢できませんでした。

冗談はさておき、人に見せる姿と、うちに隠している姿が乖離しているのは珍しくない。弱みを握られないよう仮初の自分を演じるのは人として必然の防衛本能だ。

上司の前では使える人間であることをアピールし、家では愛猫のお腹に顔を埋めて涎を

垂らす。クラスの三枚目であり、引きこもり気味なゲーマー。大抵の人は建前と本音を使い分ける。

花守はそれが少し大袈裟なだけ。果敢な年頃というのもそれを加速させていただろう。「もう一度説明するから、ちゃんと聞いててね」

僕は俯いた花守の顔を、顎を持ってこつちを向かせる。聞かん坊な人間も理解できない場面に陥れば案外素直になったりする。

「ここはハナちゃんの深層心理のその奥、夢の世界だ。寝る時に見る夢のスタジオはここを使ってる。ハナちゃんはこの場所に既視感があるでしょ？ でもうまく思い出せない、そんな気味悪さを抱えているはず。それは意識が表世界に帰る時にここでの経験のほとんどもを落としてしまうからだ。空にくっついてる星を食べれば夢を全部思い出せるはずさ」

カナちゃんが目をグルグル回しているのに気がついて口を噤む。

「ま、いま言ったのは関係ないから忘れて。嫌でも僕の仕事が終われば忘れちゃうけど」「お前、あたしの事をからかって楽しんでんだろ」

親切心で説明しただけなんだけどな。

「それはさておき仕事、解決屋の仕事の話をしよう。君の悩み……内なる自分を曝け出すことができない悩みを取り除く」

「……あたしは別に、そんなくだんねえ事で悩んじゃいねえ」

一目瞭然だと思えますけどね、この夢の世界を見れば。押し問答を続けても意味がないからあえて言わないが。

「何か嫌な感じがする方向とかないかい？ それさえ分れば僕は君と分れて一人で行くから。カナちゃんは幸せな時間をこの世界で味わっていてよ」

僕の言葉に花守は既に思い当たる場所があったようで素直に指をさした。遠くに聳える西洋の城を。

僕は花守と別れて城を目指した。気分は勇者、殺伐のさの字もないけれど。

少し進むと道がなくなり、代わりに僕の背中にデフォルメされた小さな白い羽が現れた。生えているんじゃないやなくて浮いている。本来ない羽という機関も夢の世界なら手のように自由に動かせ、不思議な浮力で持って空も飛べる。それを使って僕は簡単に城へと辿り着けた。束の間の冒険気分だったな。

「あたしの夢の中で変なことしたらマジで死なすからね」と入念に花守に釘を刺されたが、元々僕は夢の世界ではほぼ無力だ。夢の世界は長い時を経て構築されていく。人生を左右するシヨックであれば影響を与えられるが、深層心理の奥、つまりその人の根底を揺るがす事は本来は他人には出来ない。

が、一つ例外がある。

解決屋としての仕事、悩みを取り除くことだ。

城の前に立つと一人で門扉が開く。荘厳な扉の内側からはファンファーレの代わりに、瘴気に似た風が吹き付け、僕の衣服をはためかせる、

城の内装はここまでのファンタジーな雰囲気とは打って変わって、荒廃としていた。高架下みたく煤汚れていて、触れれば崩れてしまうほど脆いのが見て取れる。

部屋の中には黒い球体のような霧が浮かんでいた。あれが花守の持つ悩みだ。元は他と同じく彩り豊かだったはずの城の内装の色を奪い、装飾や床の一部を瓦解させ吸収し肥大化していく。放っておけばあと数ヶ月で城を飲み込み、花守の夢の世界全体を脅かしていた事だろう。

一歩近づく度に得も言えない嫌悪感が身体を蝕む。大量の虫が足元から上がってくる錯覚を覚え、頭が重く、身体が自分のものでない空虚なものに感じる。

他人の純粋な感情という暴力が僕の体を強くなぶる。

悩みに触れるとこれまで行くと、僕は両手を突き出した。本をイメージする。ハードカバーの無地の装丁、厚さは四センチくらい。すると想像と同じ本が両手の上に現れる。

「喰え」

僕の一言を合図に、霧は本に吸い込まれてやがて霧散した。手元に残った本にはピツリと文字が書き込まれている。

これにて解決屋の仕事は完了だ。

お客がほとんど訪れない僕の営む解決屋は、いつ誰が来ても大歓迎なんだけど、一人だけ望んでいないのに何度も押しかけてくる人がいる。

彼女の名前は音無 星華（おとなし せいか）。

黒髪ショートヘアで身長は百五十センチと小柄にも関わらず、勝気な性格で誰が相手でも気圧されない根性の持ち主。正確な年齢は知らないが見た目からして中学生とかだろう。常人では辿り着けないはずの解決屋に何度も出入りして、僕にとある要求をしてくる。

噂をすれば、やってきたぞ、音無が。

ダツダツダツ！ と雄牛の如き疾走の衝撃が近づき、バァン！ とドアが乱暴に開かれる。

「私をここで雇いなさい！」

書斎に入ってきた音無は鼓膜を破らんばかりの大声でそう言った。キーンという耳鳴りがお鈴のように耳のご臨終を悲しむ。どんな肺活量をしていれば華奢で小柄な女体からセルフ音爆弾が出てくるのか。人体とは不思議だ。

解決屋でのアルバイト雇用が足繁く音無がここに通っている目的だ。

一円も稼げていない、そもそも商業目的でやっていないのにアルバイトを雇う余裕などある訳なく、当然それは音無には伝えていない。例え僕が億万長者だったとしても雇うのは喧しいアルバイトではなく、お淑やかなメイドさんとかだろう。

僕が彼女を雇わない理由は多くあるが、一番は仕事がないからだ。お客の夢の世界に入らなくて悩みの種を探しそれを除去する。全て僕一人で事足りる尚且つ僕にしか出来ないことだ。けれど彼女にそんな理屈は通じないみたい。人体とは不思議だ。

「私を！　ここで！　雇いなさい！」

さっきの文言が十倍の威力で唱えられる。人体とは不思議だ。

あまりの音量に広いとは言えない書齋がビリビリと震える。僕と両袖机と椅子、四方の壁に設置した天井まで届く本棚からは振動で本が数冊落下してきた。人工災害と読んでも差し支えないな。

「無理」

僕は心底うんざりした表情を音無に向けて言った。無駄と知っても何か反応しなくては人工災害を振り撒かれ、四方の壁に設置してある天井まで届く本棚と数百の本達が危険に晒されてしまう。

「毎度言ってるけど、アルバイトは雇っていないんだよね。それにもしセイカちゃんを雇うことにしても給料出せないから、労働基準法って知ってる？」

「なら私がアイルくんに借金してことにすればいいじゃない。給料は全部アイルくんのポケットへ。これならどこにもお金が発生せずに私を雇えるじゃない」

「それも不当雇用だよ」

似たようなやり取りを何度したのか……数える気力もない。

僕の友人が冗談で張り出したアルバイト募集の張り紙を見て音無はここに来た。だから音無は解決屋の具体的な仕事を把握していない。最初にお客として来たわけではないので、僕は彼女の夢の世界を見たことがないし、彼女はその存在すら知らないのだ。なにが賑やかになるぞ、だよメアの奴め。一生恨んでやる。

今日もいつもと変わらぬ押し問答で一日が終わってしまった。毎日毎日、音無には友達がいらないのか？　貴重な青春のひと時をこんな寂れたところで浪費するなよ。

花守　華奈の噂は絶えない。

曰く、その眼光の鋭さはヤクザをちびらせる。

曰く、学年トップの成績なのは教師陣を牛耳っているから。

曰く、商店街の売り上げの五割は奴の財布に入る。

黒い噂の絶えない花守であるが、それも仕方のないことだ。

毎日のように遅刻し、教育指導部の教師を睨みつけ、ブレザーではなくスカジャンを着て登校。誰とも喋らずに、剣呑な雰囲気を持ち続ける姿は議論の余地なく不良そのものだった。

今日も今日とて遅刻した姫乃は気だるげな様子で教室の扉を開けた。

がしかし、扉の向こうには突然開いた扉に驚いてこちらを見る同級生の姿も、遅刻した生徒に憤る教師の姿は無かった。

「……は、なんだこれ」

そう零した花守の声は目の前のコンクリート壁にぶつかった。本来あるはずの教室はどこにも見当たらず、視界は灰色の壁に覆われていた。

突如として眼前に現れたコンクリート壁を姫乃は戸惑いながらも押してみる。ドッキリだと思ったからなのだが、コンクリートをプリントした布を掛けているだけでした、ということもなく、壁が回転して向こうには教室がありました、という仕掛けが作動することもない。手には硬くてひんやりとした感触が残るばかり。

そもそもドッキリを花守に仕掛ける度胸のある人間はこの学校にいないのだが。

——ピシャン！

壁を押すために一歩踏み出していた花守の後ろで、扉が勢いよく閉まる。

「わっ！ ちょ！ まて……よ……」

肩を跳ね上げて驚いた花守は、後ろを向いて思わず言葉を失った。

教室の扉に備えられたアクリル窓の向こうには見知った教室の姿があった。花守によく怒鳴りつける教師が黒板の前に立ち、クラスメイト達がそれを眠たそうに見ている、普段と変わらない教室の情景。

慌てて扉に手をかけるがビクともしない。

「おい、なんの冗談だ、けろや！」

ダンッ！ ダンッ！ と強く扉を殴るが誰もこちらに気づく様子はない。やけになってアクリル窓も殴るが、割れるどころかたわむ気配すらなかった。

「……あ？ なんつでだよ」

疑念が声となって漏れる。

確か、紙くずと箒でベースボールをしていた男子生徒がスイングした箒の柄で教室の扉のアクリル窓を割っていたはずだ。その程度の強度の物を花守に割れないはずがなかった。それに、花守は学校の廊下から教室に入ったというのに、なぜ窓の向こうに廊下ではなく教室が見えるのだ？

この摩訶不思議な現象を打開するため糸口を花守は周りに求めた。存外、花守は冷静さを失っていなかったが、それも次の瞬間には消え失せた。

「嘘……」

その言葉がどこまでもこだまするほど、長い板張りの廊下に花守は立っていた。ヒト二人分ほどの幅しかなく、左に伸びる廊下は果てしなく、右に伸びる廊下には遠くに米粒ほどの大きさに見える扉が行き止まりになっていた。

明らかにこの世のものとは異なる空間。

しかしそれ以上に花守に衝撃を与えたのは、廊下の左右の壁に交互に並ぶ無数の扉だった。

オープンな札がかかった木製の扉、西洋風の豪華な扉、エレベーターと思しき扉など。世界中の扉がここに集まっているのではないか、そう思わせるほど多種多様な扉が廊下にはならんでいた。

その場景に花守は手の甲をつねるが、普通に痛い。試しに頬もつねる。痛い。

もう一度アクリル窓から教室の様子を覗くが、やはり誰も花守には気づいていないようだった。ゆっくりと扉を開けようと試みるが、やはりビクともしない。カバンからカッターを出し、アクリル窓に刃を立てるが、傷は付かなかった。

そのシュールな動作は扉が開かないことを再確認するだけに終わった。

花守の脳がようやく自分が異常自体の最中にいることを明瞭に理解し始める。

「そ、そうだ携帯……!」

スカートのポケットからスマホを取り出し、電源を付ける……が、圏外だった。落胆と絶望がないまぜになった呼吸を零し、花守はスマホをポケットにしまい直した。

とにかく右側の廊下に逃げよう。奥の見えない左側は不気味だったし、不安でその場にとどまっていると心が潰れそうだった。それに、これだけ扉があるのだからどれかは開いてここから逃げ果せるかもしれない。

廊下が歩くたびに軋み、痛く耳朶を打つ。早鐘のような心臓の鼓動が強く全身を巡っているのがわかる。

途中にある扉を開かないか試すが、全て教室の扉と同じ結果に終わっていた。

障子戸を開けようとしたが開かず、障子にカッターを押し付けるが切れなかった。

ガラスのはめられた扉もいくつかあり、誰かが気づいてくれないかと思いがガラスの前で大きな動作をとってみたが、誰も気づかない。

鉄格子の小窓がついた扉からは独房に収監された囚人が見えた。囚人に気づかれることなく、格子の隙間からシャーペンなどの小物を入れ込もうとしたが、見えない壁のように物に阻まれてそれもできなかった。

ついに最初は米粒ほどの大きさにしか見えなかった木製の青い扉の前まで行き着いてしまふ。

もしここも開かなければ、次は廊下を逆側に、果てが見えないほど長い廊下を歩いていかなければならない、そう考えると不安に心が押し潰される思いだった。

—「なんであたしがこんな目に遭わなくちゃいけないんだ……」

震える手でドアノブを掴んだところで、そんな逡巡が頭をめぐる。

—「目つきが悪いから？ 不良生徒だから？ でもそれは……いや、仕方ないか。」

嘆いても現状は変わらない、花守はそう頭を切り替えてドアノブを捻った……捻ることができた。今までの扉は何をしてもびくともしなかったのに、この扉だけはなんの支障もなくドアノブを捻ることができたのだ。

ここから出られるかもしれないという期待、この向こうに何があるのかという危惧とともに扉を開く。

「ここで私を雇いなさい！」

と同時に中から脳を揺るがすほどの爆音が響く。後ろに続く廊下が何重にも木霊した。

黒髪ショートで小柄な女と、中世的な出立ちをした青髪碧眼の男。二人は花守の存在に気がつくとそっくりな満面の笑みを浮かべた。

「「いらっしやい」ませー」

花守 華奈があれから二ヶ月とたたないうちに、また解決屋へとやって来た。

僕と過ごした時間が忘れられなくて、臍げな道程を辿って来たわけではない。彼女の解決屋経験した全てを僕は彼女の記憶から消し去ったのだから。

そうする理由は幾つかある。

解決屋では本来、観測できない夢の世界へと行く。それは大きなショックとして夢の世界に影響を与えかねない。

解決屋で悩みを取り除けば心の錆が落ちたように澄み渡った気分になれる。であれば多少また新たな悩みを抱えたとしても解決屋に行けば問題ないと思う輩も出てくるはずだ。

しかし悩みというのはそうホイホイと抱えてしまうと、夢の世界はいつしか簡単に瓦解してしまう。

他にもあるが何にせよ、超常的な力というのは表沙汰にならないよう門外不出とするべきなんだ。

解決屋に来るには悩みを抱えている必要がある。大きくて吐き出す事も叶わない、あと数ヶ月で人を壊してしまう様な悩みだ。

すると今、花守が来たのと同じく世界中に繋がるドアがある廊下に招待される。

僕の知る限り、音無だけが超常的な力の垣根を踏み越えて解決屋に来た人間だ。記憶を消されず、悩みを抱えていないのにあの廊下に繋がることができる。

「な、なんなんだよ！ あんたら！ ここはどこなんだよ！」

「まあまあ。そんなに慌てないでよ」

極めて優しい口調で僕は花守を宥めると、自分の座っていた椅子を差し出して僕は両袖机に腰掛けた。花守は警戒しているのか椅子には座ってくれなかった。

「ここは解決屋。悩みを抱えている人が誘われる場所だ」

「解決屋……」と、花守の顔から血の気が引く。

「お金さえあれば何でもござれ、っていう違法的な手段にも手を染める解決屋とは違うからね。ごめんね紛らわしくって」

さて、どうしようか。僕は花守と前回と似たやり取りを繰り返しながら、別のことを考えていた。一つ、その初めてのお客に目を煌かせて待機している音無を追っ払うことのできる手段がある。

「ねえセイカちゃん、ちょっと」

「なによ」

僕は音無を手招きすると、内緒話をするみたいに耳元に口を寄せて作戦を伝えた。

「仕事をするための大切なプロセスとして、彼女——花守 華奈ちゃんには僕と一緒に寝てもらわなくちゃいけないんだ」

「最低変態」

「何と思おうと構わないけど。これはセイカちゃんへの実技テストだ。カナちゃんえお僕と一緒に寝るよう説得すれば」

「ここで雇ってくれるのね!」

「代わりにテストに合格できなかったら採用しない。もう解決屋に来ることも許さないからね」

「わかったわ!」

ふんすと鼻息を荒く意気込む音無。約束を反故にする気はないが、このテストに合格するのは不可能に等しい。大人ビデオを見過ぎた男子とかなら余裕と息巻くだろうけど、普通、初対面の男と同衾してくれと頼まれて受け入れる女はいない。同性からの頼みでも難易度は変わらないだろう。百戦錬磨の僕だからこそなせる技なんだ。

同衾するというのは音無しを追い返すためのホラではなく本当に必要なプロセスだ。僕が人の夢の世界に立ち入るには、相手が寝ていて油断している時、大きな悩みを抱えて相手が精神的に疲弊している時、その二つの条件が必須だ。

「初めまして、私は音無 星華。あなたは?」

「……花守 華奈」

「そう、よろしくね」

そういつて二人は握手を交わす。

あれ、僕の予想と全然違うぞ。大の大人にも負けない胆力のある音無と触れたもの皆全

て傷つける花守なら、どっちも引けを取らずに音爆弾バーサス三白眼の大怪獣戦争が勃発すると踏んでいたのに。

そ、そうだった……失念していた、花守がむっつりメルヘンなんだった。小さくてあどけない雰囲気音無は花守の趣味に引かかったのだ。三白眼でいかにも不良といった風体に恐れない強気ロリを花守が拒絶するわけなかったんだ。

策士策に溺れる。

音無は自分も一緒に寝るから、という条件付きで僕と一緒に寝るといふ言質を花守から見事引き出してみせた。これでテストに合格、解決屋で音無を雇うことになった。

嘆くのは後にして、僕は仕事を終わらせる為にちゃっちゃと布団を持ってきて書齋に敷いた。音無しを挟んで川の字で寝る。

「今から、カナちゃんには寝てもらいます。何も気にせず安眠してくればいいから」

「寝た後に何する気だよ」

「大丈夫、私が守ってみせるから」

仲良いですね。花守の三白眼には鋭さはなく、完全に愛玩動物を愛でているときの表女になっている。うりうりと撫でられる年上のお姉さんを守る騎士にでもなったつもりか、妙に凜々しい顔つきだ。

再び訪れた花守の夢の世界は、前回とは全く違う光景が広がっていた。

ピンク色だったわたあめの空は燻んで埃の様になり、浮かんでいたものは一つ残らず地に落ちていた。遠くに見えたはずの西洋風の城は消え去り、周囲にある家たちも彩りが欠如して灰と化し風に攫われて徐々に崩れていく。

城の中で止まっていた悩みが、夢の世界全体を脅かしているのだ。ここから本体は見えないが、ありえない速度で悩みが肥大化しているみたいだ。

嫌な予感はしていた。僕が悩みを取り除けば一年、短気な人でも半年は解決屋に来ることとはない。通常、二度も来ることが珍しいのだが。小さなきっかけで悩みというのは肩透かしなくらいちっぽけになるものだ。

そしてもう一つ、イレギュラーが発生していた。音無が花守の夢の世界に入ってきた。僕には僕以外に誰かを他人の夢の世界に引き込む力はない。何度かカップルや家族など複数人が同時にやって来たけれど、全員で一つの世界に入るといふのはできなかつた。つまり、音無は自力で花守の世界に入っていたことになる。

「な、なにこれ……」

「大丈夫！ 華奈は私が守るわ」

辺りの荒んだ光景に二人は怯え、身を寄せ合っている。

「二人とも体調は大丈夫？ 特にセイカちゃん」

「何ともないわ」

「んな事よりここはどこなんだよ、わけわかんねーぞ」

音無の顔色は悪くない。だが今問題がなくとも、長時間ここにいれば異変が起こる可能性は否めない。それは音無だけでなく花守にも同じく当てはまる。前例がないだけに僕は先の展開が読めない。

「説明したいのは山々なんだけど、今はまず仕事を進めよう。さもないと……音無が死ぬ」  
言わまいか迷って、僕は最悪の結末を口にした。言葉を濁して二人を言い包めるのもよほど効果的だと思ったからだ。本当に死ぬかはわからない、でも夢の世界は異物を嫌う。僕は大丈夫だが音巻にどんな拒絶反応を示すか判然としない。

二人に緊張が走り、先ほどまでの狼狽えが消えた。

「カナちゃん、気持ち悪さを感じる方角ってないかな。そっちの方には行きたくないって場所」

「ムカつく方向は……あっちだな、近い」

「わかった。僕はそこに行って仕事を終わらせてくる。二人は逆方向に避難してくれ」

「ちょ、ちょっと待ってよ！」

音無が走り出そうとした僕を引っ張って止める。

「何が何だかさっぱりなんだけど！ 私はどうしたらいいのよ」

「あのねセイカちゃん、さっきも言った様に最悪——」

「——死ぬ覚悟はできてるわ」

僕に被せて音無がそう言う。その目は、冗談や生半可な気持ちで言っている感じじゃない。本気で覚悟が決まっているようだ。何が彼女をそこまで掻き立てているのかは知らないが、僕の判断は変わらない。

「そんなことを軽々しく口にするな。今、セイカちゃんに出来るのはカナちゃんと逃げることだ」

これ以上知る必要はない、言外にその意思を含ませて僕は今度こそ悩みに向けて走り出した。肩越しに音無が先導して花守と逃げていくのを確認する。

走っていくと直ぐに悩みのもとにたどり着いた。球体だったものが人型にまで進んでいる。

手足の生えた黒い霧が歩きたび、辺りの彩りは失われていって物体が崩壊して吸い込まれていく。

人型の悩みは前回の球体の次の段階だ。一箇所に留まり養分を十分に蓄えると繭が孵化するみたいに開いて人型が生まれる。人型は夢の世界を歩き回り、一ヶ月で彩を全て奪い夢の世界を消し去る。

夢の世界が無くなった人は感情が欠落し、何の感慨もなく生きていくことになる。人生に絶望して自殺するのはもっと前の段階だ。最後まで悩みと戦い、結果勝てなかった人は死ぬよりもっと残酷な道を歩むことになる。

花守がそうなる前に解決屋に來れたのは僥倖だった。

僕は速やかに前回と同じ手順を踏んで本に悩みを喰べさせた。

目が覚めると解決屋の書齋で、布団の中に音無と二人で横になっていた。少し遅れて音無が目を覚ます。よかった、音無の精神が花守の夢の世界に囚われて一生起きないと言う可能性もあったから。

僕は布団から抜け出して手にしていた本を机に置いた。

音無はポーツとした顔で天井を見つめた後、横を見て、

「……華奈ちゃんは……あ、アイルくんはいる」

と呟いた。

「カナちゃんは解決屋に來る前にいた場所……たぶん学校の教室に戻れてると思うよ、全部忘れてね。音無はどこまで覚えてる？ さっきまでのこと」

「華奈ちゃんが來て、一緒に寝て、そしたら変な場所にいて二人で逃げた……それから覚えてない」

夢の世界に入り僕が悩みを取り除いた後は、解決屋での記憶を全て失って入ってきた場所に戻されて日常に戻っていく。そうなる様にできている。

だが音無は他人の夢の世界に何らかの権能を持って入り、悩みを解決した後も書齋に残って全ての記憶を保有している。

「セイカちゃんって本当に人間？」

「どう言う意味よそれ、フツーに人間よ。猿にでも見えるって言いたいわけ？」

「実は人間じゃなくて超常の存在だったりしないかい？」

でないと説明がつかないんだ。人間に育てられただけで本当は人間じゃないとか、どこか別の次元からやってきたとか。

「たとえば僕は人間じゃなくて中国の伝承の生き物、獮（ばく）だし。人の夢を食べるって奴ね」

「ば、ばくって……信じられない」

「信じる信じないは勝手だけど、セイカちゃんも見たでしょ？ カナちゃんの夢の世界を。」

解決屋っていうのは僕が獮の力を使って夢の世界に入って悩みを喰らうのが仕事なんだよ」

「悩みを？」

「そう」

僕はさっき喰らった花守の悩みが書かれた本を音巻に渡す。そこには花守の悩みが詳細に書かれている。子どもの頃から幼女趣味の物が好きだったけど、目付きのせいで友達に怖がられてそれを共有できなかったこと。空手家の父親のせいで喧嘩は強かったが誤解が加速したこと。周りから囁かれる陰口や噂。お姫様に憧れて金髪にしたがそれが空回り、母親にも趣味を否定されたこと。

僕はそう言った悩みを喰べることで生きている。肉食動物みたいに他の食べ物でも栄養は取れなくてもないが、肉を取らないと死んでしまう。

「ねえアイルくん、さっき悩みを喰べて言ったよね」

僕はそれを首肯する。

「それって華奈ちゃんの環境を解決することって出来ないんだよね」

「出来ないよ。あくまで悩みを取り除くだけ。だからもう一度同じ悩みを抱えるか、開き直れるかは本人次第だ」

「私、華奈ちゃんの所に行ってくる」

「やめておきなよ、彼女はセイカちゃんのことを忘れてるよ」

「だからってこんなのであんまりじゃない？」

本を抱えて音無が絶叫する。

「目付きがちよっと悪いくらいで周りから忌避されて、誰とも趣味のことを楽しく話せないなんて！それに、私は解決屋のアルバイトだもん。アフターフォローまでこなすのが一流の仕事人でしょ？」

「……ハナちゃんがどこに住んでるのか知ってるの？僕は知らないから案内なんて出来ないよ」

僕の忠告を聞かずに音無は書斎のドアを開けて出ていった。

「大丈夫よ、だって私たち友達だもん」とその一言を残して。

一気に静かになった書斎で一息つく。

音無のことはよく理解できない。けれどもそれは彼女が本当に人間だからなのかもしれない。人ならざるものは僕を含めて人の気持ちを理解できない傾向にある。僕は悩みを取り除いた後の環境なんて考えても見なかった。

一人の報われない少女の為に走り出した音無……あのアルバイトがいればもしかすると解決屋はより良くなるのかもしれないな。